

九条ブログはらまち

「はらまち九条の会」ニュース No. 25

2007(平成19)6月4日(月)発行



<1928(昭和3)年6月4日は、軍閥の張作霖が日本の関東軍の陰謀で爆殺された日>

張作霖(ちょうさくりん)とは、今から80年前の中国(中華民国)で、東北3省で実権を握っていた軍閥(私的軍事集団の軍人)。満州(東北部)を直接支配しようとしていた関東軍は、張が北京から奉天に帰る列車ごと爆破した。田中義一内閣は陸軍の調査で真相を知ったが公表せず、天皇にとがめられて総辞職した。

現在でも国民の知らないところで、マスコミの協力の下、政治的な“陰謀”が行われているのかも!?

おかげさまで、映画『日本の青空』 上映会益金も配分されました!

ちょうど一年前の6月10日(土)、東京千駄ヶ谷の日本青年館で開催の「九条の会・全国交流集会」分科会で大澤豊監督から直接、映画『日本の青空』制作のお話をうかがいました。それから一年、映画制作から上映までのおおよその本会との関わりは<右表>のとおりです。

幸い試写会も上映会もまずまずの成功で、それなりの利益金も出て、上映実行委員会から「小高九条の会」と「はらまち九条の会」に配分されました。これもひとえに会員の皆様のご理解やご協力、お力添えの賜物と、事務局員一同心より感謝と御礼を申し上げる次第です。

～戦後、焼け跡から生まれた世界の宝
日本国憲法はこうして作られた!～



日本国憲法施行

60周年記念作品

もう一度小高で「日本の青空」上映会!

「忙しくて見れなかった」「原町は夜だけの開催で不親切だ」「協力券を買ったままなのに!」などの声も強く、小高九条の会では、もう一度小高で上映会を開催することになりました。「とにかく一人でも多く、特に若い人に見てほしい。郷土の偉人鈴木安蔵のことを知ってほしい」と話されています。上映時刻など詳細は未定ですが、「はらまち九条の会」でもお手伝いをしたいと相談しています。

**8月11日(土)小高・浮舟会館で
日本の青空 上映会**

0「日本の青空」制作から上映まで0

2006(平成18)年

2月18日 本会主催で、佐藤鶴雄氏講演会「鈴木安蔵と日本国憲法」。

6月10日 東京の全国集会で大澤豊監督から映画制作の企画を聞く。

6月13日 事務局で映画制作に協力することを決める。製作協力券を購入し、会員への販売開始。

8月1日 大澤豊監督・小室皓充製作委員長など、小高九条の会へ。

8月2日 大澤監督など映画製作スタッフ、南相馬市役所へ赴き渡辺一成市長を表敬訪問。

11月3日 あきいち2006で市民に映画や鈴木安蔵の業績をPR。製作協力券など販売。

11月23日 小高神社と相馬高校でロケ。女優藤谷美紀など来る。

12月17日 福島市民会館で「日本国憲法と鈴木安蔵を語るつどい」。映画『日本の青空』を支援する福島県の会が発足。

2007(平成19)年

1月17日 南相馬市議会議員26名のうち16名が映画製作協力券を購入されました。

2月17日 映画『日本の青空』上映南相馬実行委員会が発足。

3月初旬 映画完成

3月17日 小高区浮舟会館で試写会。招待者など220名が入場。

4月21日 小高区浮舟会館で一般上映会。3回で850名が入場。

4月27日 原町区南相馬市民文化会館(ゆめはっと)で一般上映会。夜1回で650名が入場。

5月30日 映画上映南相馬実行委員会最終会を開催。活動経過、会計報告、利益金の分配。

がんばれ小田実さん! (2007.6.5「朝日」より)

私たちの「九条の会」は3年前の2004年6月10日、井上ひさし、梅原猛、大江健三郎、奥平康弘、小田実、加藤周一、澤地久枝、鶴見俊輔、三木睦子の九名が発表した「九条の会アピール」から始まりました。その一人の小田実さん(小説家・評論家・75歳)が今、末期の胃ガンと闘っています。特に団塊の世代にとって、1961年の『何でも見てやろう』や、65年のベ平連(ベトナムに平和を!市民連合)等でカリスマ的な人物です。



映画「日本の青空」 試写会での挨拶

若松 丈太郎

若松です。こんにちは。

わたしは、相馬高校に勤務していた当時、鈴木安蔵（*1）さんが旧制相馬中学の生徒だったときの文章四点を「学友会雑誌」から見つけ、そのほかの文章数点とともに、小文を書いた「鈴木安蔵先生 生誕百周年記念シンポジウム」で少年期の安蔵さんの文学的環境についてお話しをしたこともありま

す。また、映画監督亀井文夫（*2）さんが旧原町生まれであることを知ったとき、彼の映画「上海」や「戦ふ兵隊」を見た

いと思えました。そのためには自主上映をするしかない、と友人たちとともに「亀井文夫の映画をみる会」をつくり、三年の三月から一〇月まで毎月一回、あわせて八回、十三作品の連続上映と関連講演四回を開催しました。山形国際ドキュメンタリー映画祭が亀井文夫を特集したのは二〇〇一年でしたから、その八年まえのことです。

こんなことをしたことがあるので、今回、映画「日本の青空」上映南相馬実行委員会の代表という役回りをひきうけることになったものと思えます。よろしくお願いいたします。

さて、わたしは一九三五年生まれです。六歳の冬の朝、真珠湾攻撃を伝える大本営発表のラジオ放送を、どこでどんな

しかも、この「日本国憲法」の基礎になった、憲法研究会による「憲法草案要綱」を起草した中心人物が、郷土の先輩鈴木安蔵さんであることは、わたしたちが大いに誇りとするところでは

その、鈴木安蔵さんの業績を中心に据えた映画「日本の青空」が、大沢監督ほかのスタッフ・キャストのみなさんによって、このほど完成しました。

大沢監督、おめでとうございます。

きょうの試写会のと、四月には、安蔵さんがこよなく愛した故郷・小高と原町で先行上映会が行われることになりました。この試写会と上映会は、南相馬市（*3）および同文化振興事業団、また浮舟文化会館のご理解をいただき、共催事業として運営されることになりました。実行委員会を代表して、この席から御礼を申しあげます。

さらには、県内各地、いや、全国各地での上映も続々決定しているとのこと。こんなうれしいことはありません。ご来臨のみなさま。本日はお忙しいなかをお出ましいただき、心からの感謝を申しあげます。どうか映画「日本の青空」のことを多くの方々にお伝えなさって、四月の上映会の会場があふれんばかりになりますよう、お勧めいただきたいと存じます。

原町市が市民に配ったこの小冊子のうしろには、「教育基本法」と「児童憲章」も併せて掲載されています。「教育基本法」は昨年廃止され、旧法となつてしまいました。「日本

ふうに聞いたかを明瞭に記憶しています。それからあとの三年八カ月あまりのことも、子どもの目でしっかりと見届けました。もちろん、四五年八月十五日正午のラジオ放送を聞いたシチュエーションも記憶しています。

戦後になって思い返してみますと、それは狂気の時代でした。おとなたちはみな狂っていました。もちろん、子どもたちも巻き込まれて、いっしょに狂いました。さいわい、わたしたちは生き残り、正気をとり戻すことができました。

いま、七十歳あまり、こうしてつつがなく生きてこられたのは、いろんなことが重なって幸いしたのでしようが、「日本国憲法」に護られたことがいちばん大きかったと思っています。それは、戦争をしない国に生きているからだけのことではありません。

この、てのひらに収まる六〇ページばかりの小冊子の表紙には「憲法」という文字が記されています。三十五年ほどまえ、旧原町市が市民に配ったものです。ときどき取り出して読んでは、そのたびごとに感動しています。「前文」や第二章「戦争の放棄」以外にも、第三章「国民の権利及び義務」さらに第十章「最高法規」などにとりわけ感動します。

どうしてこれらの条文を、いま、古びてしまったと言えるのでしよう。むしろ、全人類の願いを代弁しているものとして、二十一世紀にこそ、よりいっそう尊重されるべき普遍的な条文なのです。誰がつくろうといいものはいい。そう、わたしは思っています。

国憲法」第十二条は国民に権利の保持責任を訴えています。つまり、権利のうえに安住して何もしていないと、その権利を失ってしまうぞと戒めているのです。わたしたちを護ってくれた「日本国憲法」や「児童憲章」を、こんどは、わたしたちがしっかりと護らねば、多くの大切なものを失うことになるのでしよう。

とりわけ、若い、未来を担う人びとがひとりでも多く、映画「日本の青空」（*4）を見て、憲法に関心をもつてほしいとねがっています。ぜひ、鑑賞をお勧めくださいますよう、皆様に重ねてお願い申しあげます。

本日は、ありがとうございます。どうぞ、ごゆるりとご鑑賞なさいますよう。 (二〇〇七年三月十七日)

*1 鈴木安蔵（一九〇四―一九八三年）旧小高町生まれ。憲法学者。憲法研究会「憲法草案要綱」の起草者。静岡大学名誉教授。著書「憲法の歴史的研究」ほか多数。

*2 亀井文夫（一九〇八―一九八七年）旧原町生まれ。ドキュメンタリー映画作家。映画「戦ふ兵隊」「日本の悲劇」生きていてよかった」「世界は恐怖する」ほか多数。

*3 南相馬市 福島県東部の市。二〇〇六年、原町市、鹿島町、小高町が合併して発足。人口七万二千余。作家植谷雄高、島尾敏雄の本籍地。江戸川柳研究家大曲駒村、イタリヤ音楽研究家天野秀延、文芸評論家荒正人などの出生地。相馬野馬追祭が有名。

*4 映画「日本の青空」についての問い合わせ、上映日程など、www.cinema-indices.co.jp/azorai/



○去る三月十七日、映画「日本の青空」試写会（会場・小高区浮舟会館）での、上映実行委員長若松丈太郎氏の挨拶の全文です。大変意義深い内容ですので、本人の許可を得て掲載させていただきました。

（戦争と平和を考える時の会発行）『いのちの籠』第6号・二〇〇七年六月一五日より